プルースト的〈小説〉の夢
――ロラン・バルト

石川美子

ロラン・バルト（一九一五～一九八〇）にとって、プルーストはもっとも敬愛する作家のひとりだった。バルトの全著作のなかで、いちばん多く名前のあげられた作家がプルーストだったと言ってもいいかもしれない。とはいえ、バルトは生涯をつうじて数多くのプルースト論を発表したわけではなかった。また、プルーストへの言及のしかたは、年とともに大きく変化していった。その変遷は、四つの時期に分けて考えることができるだろう。

まず、バルトがはじめて評論を発表した一九四二年から、構造主義批評を標榜していた一九六五年ごろまでの時期である。この二十年あまりのあいだは、評論やエッセーのなかでしばしばプルーストの名前をあげていたが、プルーストについての論考を発表することはなかった。独特なプルースト観を口にするわけでもなかった。プルーストを好みつつも、意識的に語っていたとは言えない時期である。

一九六六年になると、プルーストをめぐる評論を発表するようになる。まず、プルーストの伝記についての書評を書く。ついで、プルーストのテクストを分析した論考を二つ発表する。そして一九七三年から七七年までの時期には、まとまったプルースト論は書いてはいないものの、さまざまな著作のなかでプルーストを読むよろこびを語っている。当時のバルトがしばしば口にしていた「テクストの快楽」は、プルーストの読書とつよく結びついていたのである。またそのころからバルトは、プルーストの伝記的事実に興味をしめすようにもなっている。

一九七八年から死去までの二年あまりのあいだは、バルトはプルースト的〈小説〉を書きたいと願い、模索していた。プル

ーストがどのように『失われた時を求めて』を書いたかを考察する論文をいくつか書き、コレージュ・ド・フランスでの年間講義においてもたえずプルーストに言及していた。最晩年のバルトは、プルーストを自分の〈小説〉の師とあおいで生きていたのである。

一　バルトの著作にみられるプルースト

（一）幸福な読書――一九七七年まで

一九五三年に『零度のエクリチュール』を出版して批評家としての活動をひろげていたバルトであるが、彼がプルーストについて直接的に語るのは一九六六年になってからであった。ジョージ・D・ペインターによる伝記『マルセル・プルースト』の書評、「対比列伝」[1]が最初である。しかし当時のバルトは、文学作品を作者の人生によって解釈することを批判する「新批評」を標榜していた。したがって書評は、伝記中のプルーストと『失われた時を求めて』の主人公とを対比させ、区別しようとするものであった。

一九六七年に言語学者ローマン・ヤコブソンの七〇歳を祝う論文集が出されることになり、バルトは「プルーストと名前」というタイトルの論考を寄稿する。プルースト作品における固有名詞の効果を言語学的に分析するものであったが、「プルーストの作品を彼の生涯によって説明しようというのではない」[2]と述べることを忘れなかった。当時のバルトはやはり、作者の存在を作品解釈から遠ざけようとする「作者の死」を主張していたのである。

一九七一年は、プルーストの生誕一〇〇年にあたった。この年にバルトは、イタリアの雑誌『パラゴーネ』のプルースト特集号に、短いプルースト論「研究の構想」[3]を発表している。『失われた時を求めて』の一場面において、娼家の女将だと思われた人がじつは大公妃だった、という逆転の記述について分析したものであった。

翌一九七二年は、プルースト没後五〇年であった。したがって七一年から七二年にかけての二年間は、プルースト・シンポジウムがさかんに催された。バルトはシンポジウムでの発表はおこなわなかったが、参加して発言したりしている。このときにプルースト作品をまとめて読みかえしたのであろう。やがて『失われた時を求めて』のテクストだけでなく、作家プルーストの伝記的事実にも興味をもつようになる。わずか数年前には「作者の死」を主張していたバルトが、「作者の回帰」を口にするようになるのである。このことについて、彼自身、のちになって次のように回想している。

> 当時［一九六〇年代］、わたしもそうした傾向［作者を消し去ること］を端的に表わすタイトルをもった論考を書いたものです。「作者の死」です。新批評は作者を抑圧した

のです。[…]

わたしの立場の転換は、『テクストの快楽』のときに起こりました。理論的超自我のゆさぶり、好きなテクストの回帰、作者の「抑圧解放」、あるいは「脱－抑圧」が起こったのです[4]。

『テクストの快楽』が刊行されたのは一九七三年であるから、そのころにバルトは「作者の死」から「作者の回帰」に転換したということになる。

「作者の回帰」は、さらに、バルト自身という「作者」の回帰をももたらした。やがて彼は自伝的な作品を発表するようになる。一九七五年に刊行された『彼自身によるロラン・バルト』は、自伝的な三〇〇あまりの断章からなる作品であった。この本には、プルーストを読むよろこびと、プルーストへの共感とがちりばめられている。たとえば『失われた時を求めて』の登場人物名を用いた「セリーヌとフローラ」という断章において言語表現の効果について述べたり、無意識的記憶想起は自分にとっては匂いによって起こると語ったりしている。また、バルトが子ども時代をすごしたバイヨンヌをプルーストのイリエに重ねて描いたりもしている。

[祖母の]願望のおもな対象は、薬剤師の未亡人のルブフ夫人というひとであった[…]。肝心なのは、その人を毎月のお茶会によぶことだったのである（その続きはプルーストを）[5]。

結局、一九七七年ごろまでのバルトは、批評家あるいは読者として、幸福にプルーストを読んでいたのだと言えるだろう。ときには自分の理論を例証するためにプルースト作品を分析したり、ときには自分の立場を転換するための支えとしたり、ときには読書のよろこびをじゅうぶんに語るためのモチーフとしていたのである。

（二）〈小説〉の模索――一九八〇年二月まで

一九七七年十月末に、バルトの母が亡くなった。生涯ずっとともに暮らした愛する母の死は、悲しみや苦しみをこえた絶望的な思いをバルトにもたらした。その絶望のなかで、彼は小説を書きたいと願うようになる。母が生きたということまで忘れられてはならない。母を作品に書き残すことで、愛する母のすがたを永遠に残すのだ、と。こうして、プルーストふうの自伝的な〈小説〉を書くための模索がはじまったのである。

そして一九七八年十月に、「長いあいだ、わたしは早くから寝た」という題の講演をおこなう[6]。『失われた時を求めて』の冒頭の文を題にもつこの講演は、バルト自身が語っているように、「プルーストとわたし」とも言うべきものであった。講演は二部からなり、第一部はプルーストについて、第二部はバルトについてとなっている。

まずはじめに、プルーストが最初は評論の方向と小説の方向という二つの道に引き裂かれていたことをバルトは指摘する。だが一九〇五年に母が亡くなり、試行錯誤ののちにプルーストがえらんだのは、評論でも小説でもない第三の形式であった。その特徴は、書くことに到達するまでの人生を物語るのではなく、「書きたいという欲望」を物語にしていることだとバルトは言う。したがってこの講演の第二部では、バルト自身の「書きたいという欲望」について語ることになる。プルーストのように自分もまた、母の死を契機として、「新たな生」、「新たな作品」をはじめるのだ、と。

この講演の二か月後に、バルトは「固まる」という題の短い文章[7]を発表する。そこで分析されているのは、プルーストが一九〇九年九月に突然に書きかたを変えたことである。すなわち、それまでは断片的な短い形式で書いていたのが、その後は織り上げられた長い形式に変わった、というのである。一九〇九年九月に何が起こったのか。母の死が作品をいわば「生みだした」ことに疑いはないが、それだけではなく技術的な方法を見つけたこともあった、とバルトは分析している。断章形式で書きつづけてきたバルト自身もまた、〈小説〉を書くためには、断章を物語にする方法を見つけねばならなかったのである。

そうして、見つけたのだろうか。「固まる」の論文の一年後に、彼は『明るい部屋』を発表する。この作品は四八の章からなっている。つまり、断章集ではなく一続きの物語なのだ。作品は二部構成になっている。第一部は写真の本質を探究する知的遍歴の物語であり、バルト自身の知的自伝がゆるやかに重ねられている。第一部の最後で、彼はこう語る。

> 「写真」の明証を見つけるために、わたしは自分自身のなかにさらに深く降りていかねばならなかった[8]。

この言葉は、まさにプルーストが『失われた時を求めて』の最後において、昔の瞬間をふたたび見出すには「自分のなかにさらに深く降りて」[9]ゆかねばならない、と語った表現にほかならない。

『明るい部屋』第二部では、バルトは母の子ども時代の写真を発見し、その写真をつうじて、「写真」の本質を見出すことになる。この第二部においては、プルーストの名を四度引用している。たとえば母を失った悲しみについて、つぎのように書いている。

> プルーストの小説の語り手が祖母の死に際して言ったように、わたしもまたこう言うことができた。「わたしはたんに苦しむだけでなく、わたしの苦悩の独自性をどうしても大切にしたかったのだ」と[10]。

『明るい部屋』は、バルトがプルーストに共感しながら書きあげた、プルースト的探求の物語だと言ってもよいだろう。

以上が、バルトにおけるプルーストへの言及の変遷である。まとめると、つぎのようになるだろう。すなわちバルトにとってのプルーストは、一九七二年ごろまでは分析や評論の対象であったが、七三年ごろからは読書の快楽の対象となり、やがて伝記的な「作者の回帰」をもたらすことになる。だがバルトは一九七七年の母の死を契機に〈小説〉を書きたいと願うようになり、プルーストが短く不連続な形式から長い形式へ移行したことについての考察を重ねながら、自分にとっての新たな形式である〈小説〉を模索する。そして一九八〇年二月初めにプルースト的探求の物語である『明るい部屋』を発表する。しかしそれから一か月もたたずして、バルトは交通事故に遭い、その一か月後に亡くなったのである。

このようにまとめることができるのだが、いくつかの疑問が残る。まず、一九七七年十月の母の死から、「長いあいだ、わたしは早くから寝た」の講演をおこなうまで、一年という時間が流れている。そのあいだ、バルトは何を考えていたのだろうか。また、『明るい部屋』は、本の最後に記された言葉によると、執筆は「一九七九年四月十五日から六月三日まで」だったという。書き終えてから一九八〇年二月はじめに出版するまでの八か月間、バルトは〈小説〉にかんして何をしていたのだろうか。そして彼は、一九七八年十二月から、事故に遭う八〇年二月末まで、コレージュ・ド・フランスで「小説の準備」という講義をおこなっていたが、それは彼自身の〈小説〉の模索にどのように作用していたのだろうか。

二　〈小説〉を模索するバルト

（一）喪の日々から「文学的回心」へ

一九七七年十月末に母を亡くしたあと、バルトは鬱々とした日々を送っていた。母の死の翌日から、彼は『喪の日記』を書きはじめる。日記には、悲痛な苦悩の言葉がつづられた。死から三か月半ほどがすぎ、七八年二月後半にコレージュ・ド・フランスでの年度講義「〈中性〉について」を開始する。バルトは毎年、講義のはじまる一か月前にはその年度に話すことすべてを講義ノートに書き終えておく習慣があった。しかしこの年は、母の死ゆえに講義の準備は進まなかったようである。そもそも〈中性〉というテーマ自体が、母の喪に苦しむバルトには興味のもてないものになっていた。したがって、講義の初日に彼はつぎのように語っている。

> わたしがこの講義の主題を決めたとき（昨年五月）と、講義の準備をしなければならなかったときとのあいだで、わたしの人生において、ある重大なできごとが、近親者の

死が起こりました。〈中性〉についてこれから語ろうとする主体は、語ろうと決意した主体とはもはや同じではないということです。［…］でもコレージュの掲示を変えることはできません[11]。

したがって、この時期の講義には、バルトの「書きたいという欲望」を聞きとることはできない。とはいえ、なんどか母の喪のことに言及していたのではあるが。三月ごろには、カイエ・デュ・シネマ社から「写真についての本」の注文を受けたようである。しかし、どのように書くべきか、決められないままでいた。

四月になり、復活祭休暇になった。バルトは二週間ほど、カサブランカに滞在する。ある日、たったひとりで部屋にいたとき、突然に「文学的回心」をうながす声のようなものを感じた。文学の道に入るのだ、残された人生を新たな作品を書くことにささげて生きるのだ、という声を。これが「四月十五日の回心」である。それはプルーストの「見出された時」における啓示とおなじようなものだと思ったバルトは、ひさしぶりにプルースト作品を手にとる。そして、それまで鬱々と沈みこんでいたバルトが、ようやくプルーストに支えられるようにして、〈小説〉にむかって歩きはじめたのである。

その変化は、すぐに講義にあらわれた。五月の講義では、さっそくプルーストのことに言及している。「プルースト的隠遁」という言葉をもちいて、母の死後に修道院に入るように「作品のなかに」入ったプルーストのことを語ったのである。そのときにバルトは、「プルーストの人生にわたしはいつも魅了されてきた」[12]と、「作者の回帰」についてふたたび述べている。

そして母の死の直後からずっと考えていた「母についての本を書きたい」という思いと、「写真についての本」の注文を受けたこととを合わせて、「母の写真の本」を書こうと考える。しかし内容は決まっていない。とりあえず、母の写真の整理をはじめる。そのときに「温室の写真」を発見したのである。一九七八年六月のことだった。それは、母が五歳のときの写真であったが、まさに母の本質をあらわしている写真だった。『明るい部屋』の中核となる写真を発見したのである。

七月になっても、プルーストの読書はつづいた。『喪の日記』には、プルーストへの共感の言葉がならぶ。プルーストが母を亡くしたときに記した悲しみの言葉を自分の日記に書きうつしてゆく。あたかも、悲しみを言葉にすることをプルーストから学んでいるかのように。だが、どうしても解決できない問題があった。やはり、いかに断章群を長い物語にするかということであった。そのような模索のなかで、この時期にバルトは「長い間、私は早くから寝た」の講義をしたり、「固まる」の小論を書いたりしたのである。

（二）〈小説〉と俳句と写真

一九七八年十二月二日に、コレージュ・ド・フランスでの年度講義「小説の準備Ⅰ」がはじまる。初日にバルトは「四月十五日の回心」のことを語り、ダンテの『神曲』のように、わたしも人生の半ばにして暗き森に分け入り、先導者に導かれて、新たな生、新たな作品をはじめたい、という決意を語る。バルトにとっての先導者とは、もちろんプルーストである。

しかし問題はやはり、断章を長い物語にする方法であった。バルトはまず、記憶について考えてみる。そしてつぎのように語る。わたしには記憶力が欠如しているので、プルーストのように過去想起をすることができない。過去を語ることができない。では、現在から〈小説〉は作れないものだろうか、と。このとき彼はプルーストの言葉を思いだす。

> もし一篇の小説を書くとすれば、わたしは次々と起こる日々の音楽を異なったものとするように努めるだろう[13]。

バルトは思う。「日々の音楽」とは、まさに俳句そのものではないか、と。ここで突然に俳句が登場し、俳句についての考察がはじまる。そして「小説の準備Ⅰ」の講義十三回のうち十回が俳句にあてられることになる。しかも、プルーストと俳句とを比較しながら考察をするのである。だが、すぐに結論は出る。プルーストの小説が記憶をめぐって広がってゆく作品だとしたら、俳句は瞬間にとどまるエクリチュールにすぎない、と。

> 『失われた時を求めて』の全体がマドレーヌから出てくるのです、日本の水中花が水のなかで開くように。［…］だが俳句においては、花は開いていません。それは水に入れない水中花なのです。つぼみのままです[14]。

俳句から物語を生みだすことは破綻した。しかしここでまた、バルトはプルーストの言葉を思いだす。

> ある芸術を、べつの芸術のかたちで考えること[15]。

そのときバルトは、「写真についての本」のことを思ったのだろう。写真と俳句を同時に考えることを思いついたのである。その結果、俳句の本質とは、「それはかつてあった」という思いと「これだ」という真実の悟りのようなものだという結論にたどりつく。この俳句の本質とは、まさに『明るい部屋』のなかで発見されることになる写真の本質そのものである。すなわち、〈小説〉の模索は、プルーストと俳句を経由することによって、『明るい部屋』という写真をめぐる本を生みだしたのである。

しかし、断章から物語に移行する問題については、依然として解決できないままだった。年度講義の最後の日である

一九七九年三月十日になっても、バルトは「固まる」の論考で述べたことを繰りかえすだけだった。そして、「わたしは嘘がつけません。だから〈小説〉に到達しないのです」[16]と述べて、「小説の準備Ⅰ」の講義を終えたのだった。

(三)〈小説〉の構想

「小説の準備Ⅰ」の講義を三月に終えたあと、バルトは四月から六月まで『明るい部屋』の執筆にはげんだ。だが本を書き終えると、ふたたび〈小説〉の模索にもどる。そして、七月下旬には気弱な言葉を日記にしるしている。

> 「計画」のあらゆる「救出」は失敗している。もう何もすべきことがないし、自分の眼前にはいかなる作品もないように感じる[17]。

「計画」の「救出」とは、断章を物語にして、〈小説〉を書くことであろう。弱気になり、苦しみながらも、八月下旬から九月初めにかけて『新たな生』と題する〈小説〉の構想を七つ書いている[18]。構想によると〈小説〉は、作品を書こうとする者を主人公とした物語となるはずであった。

> 母の死後、あてどもない生活を送っていたわたしは、一九七八年四月十五日に啓示をえて、新たな人生をはじめようと決意する。プルーストを師とあおぎ、新たな作品の模索をするが、断章を大作に織りあげる技法が見つからない。だが最後に奇跡的な出会いがおとずれて、わたしは小説『新たな生』を書きはじめることになる。

この〈小説〉では、バルトの経験や思索がそのまま述べられている。小説というよりは自伝だと言ったほうがいいかもしれない。

この年の夏には、「パリの夜」と題する日記体小説の執筆もこころみている。おそらくこの日記は、小説『新たな生』のなかに組みこまれるはずだったのではないだろうか。そして九月中旬になると、バルトはコレージュ・ド・フランスでの講義の準備をはじめる。講義ノートの作成には二か月ほどを要し、十一月二日に書き終えている。講義タイトルは「小説の準備Ⅱ」であった。

年度講義は一九七九年十二月一日にはじまった。しかし、前年度の講義のくりかえしが目についた。「書きたいという欲望」について述べたり、自分には嘘がつけないので小説が書けないと言ったり、「作者の回帰」の魅力を語ったりすることが多かった。断章を物語に織りあげる方法という問題については、「固まる」の論考の内容をくりかえすだけであった。そして最終日の一九八〇年二月二三日には、自分にとって小説を書くのはまだ待機している状態だと語って、講義を終えたのである。

この「小説の準備Ⅱ」の講義には、あまり熱意が感じられない。講義ノートにしてもそうである。バルトは、講義開始の一か月前には講義ノートを書き終えていたので、講義の直前になると加筆や訂正をするのがつねであった。ところがこの「小説の準備Ⅱ」の講義では、ノートを十一月二日に書き終えたまま、加筆もほとんどせず、ただ読みあげるだけ、といった感じだった。なぜであろうか。

「小説の準備Ⅱ」の最終日の二時間目は、新しいセミナーの第一回でもあった。セミナーの題は「プルーストと写真」であり、ナダールが撮影したプルースト関係の人びとの写真を六〇枚ちかく見てゆくものだった。バルトは言う。このセミナーは、プルーストの作品や文学に関心をもつプルースト主義者のためではなく、プルーストの生活や交友関係などに興味をもつマルセル主義者のためのものなのです[19]、と。そして、現実の写真と小説の場面とを比較してゆくのである。たとえば、レオニ叔母の家や庭が実際にはとても小さいこと。スワンのモデルは、シャルル・アースはいいが、俗っぽくて太っちょのニコラ・ベナルダキだとしたらありえないことだ、など。このようにして、二月二三日のセミナーは終わり、その二日後にバルトは交通事故に遭ったのだった。

最終日の講義とセミナーは、理解に苦しむものだと言ってもいいだろう。「小説の準備Ⅱ」の講義はずっとくりかえしばかりで、断章を物語にする方法は見つからないままだった。にもかかわらず、四か月近くも前に書かれたノートをただ読むで終わったことが、なにか不可解な印象をあたえる。バルトの最後の思索はどうなっていたのだろうか。セミナーにしても不可解である。『明るい部屋』を出版した三週間後に、なぜまた「写真」のセミナーなのか。

三　バルトの最後の思索

（一）最後の論考

バルトが交通事故に遭ったとき、彼の机の上には「スタンダール論」の原稿が置かれ、タイプライターで清書している途中であった。一か月後にミラノでおこなわれるスタンダール学会での発表原稿であり、「人はつねに愛するものを語りそこなう」という題がつけられていた。バルトは言う。スタンダールは、旅日記のなかではイタリアへの愛を表現することに失敗しつづけたが、最後の長編小説『パルムの僧院』において愛を語ることについに成功したのである、と。それは、断片的に語る旅日記をあきらめて、すべてを物語にゆだねたからであった。では、いかにして「旅日記」から「小説」へ移行したのか。それは個人的で不毛な愛に象徴的な普遍性をあたえる虚構の力によってであった、とバルトは断言する。

若かったころのスタンダールは「嘘をつくと［…］うん

ざりする」と書くこともできました。彼はまだ知らなかったのです。真実にとっては回り道でありながら、彼のイタリアへの情熱にとってはついに勝ちとった表現でもあるような――奇跡です――虚構が、小説という虚構が存在するということを[20]。

スタンダールのことを語りながら、バルトは自分自身の〈小説〉の模索を重ねていたのであろう。虚構、嘘をつくこと、とは、どういうことか。一年前の一九七九年三月十日の講義では、バルトはつぎのように語っていた。

小説は「偽り」から始まるのではなく、真実と偽りとを予知せぬままに混ぜあわせるときに始まるのでしょう。[…] したがっておそらくは、小説を書くにいたることとは、じつは、嘘をつくのを受け入れること、嘘をつくにいたることなのです。[…] 結局のところ、小説への抵抗、小説の〈実践の〉不可能性とは、「道徳的な」抵抗なのでしょう[21]。

そして一九八〇年一月十二日の講義ノートでもこう書いている。

わたしは小説を書きたいという頑固な欲望をもちつつ、どうしても書くことができないと認めているわけですが、その理由は、「嘘がつけない」からなのです（「つきたくない」のではなく、「つけない」のです）。それは、わたしが真実を言っているということではなく、嘘を「考えだす」ことがわたしの限界を超えているということです[22]。

事故に遭うひと月半前の講義でこう語ったのであるが、しかしこれはバルトの最後の思索ではない。なぜならこの文は、その二か月以上前に書かれた講義ノートの言葉であり、一月十二日のバルトはただそれを読んでいただけだったからである。

それでは、彼の最後の思索はどのようなものだったのか。「スタンダール論」を書いたときのバルトは、スタンダールとおなじく、「小説という虚構」を見出していたのだろうか。あるいは、スタンダールにはできたが自分はまだ見出せないでいる、という思いをこめてスタンダール論を書いたのだろうか。

（二）小説的虚構

バルトの最後の思索を知るための手がかりは、三つあるように思われる。

ひとつは、彼の小説『新たな生』の構想である。構想は八枚の紙に書かれていた。そのうち七つは一九七九年の夏に書かれているが、最後の一つだけは十二月十二日に書かれたものである。夏の構想と十二月の構想とをくらべてみると、できごとの順序が違っていることに気づく。

夏に書かれた構想では、「母の喪」→「あてどもない生活」→「四月十五日の決意」→「作品の模索」→「奇跡的な出会い」、というように、実際にバルトが経験した順序になっていた。最後の「奇跡的な出会い」は現実にはまだおとずれておらず、バルトはそれを待っている状態だったのであるが。ところが十二月に書かれた構想では、冒頭の「母の喪」の横に「あるいは最後に置くこと」という書きこみがなされている。できごとの起こった順序を変えて、自分の体験とは異なる物語をつくりだそうとしていたのだろうか。嘘をつくことを試みようとしていたのだろうか。

バルトの最後の思索を知る二つめの手がかりは、講義の最終日である。「小説の準備Ⅱ」の講義では、ノートをただ読みあげるだけということが多かったが、一九八〇年二月二三日だけはすこし違っていた。講義ノートと録音された実際の講義[23]をくらべてみると、最後の部分をすこし変えて話していることがわかる。

講義の最後で、なぜ今、わたしは小説を書かないのか、と自問し、「待機」の状態にあるからだと語る。そのあと、講義ノートではこう書かれている。

> おそらく、「道徳的な」困惑のようなものがあるのでしょう[24]。

ところが実際の講義では、この部分を削除し、かわりにつぎのように語っている。

> 欲望している本があります。でも、その本は、今はまだ欲望段階でしかありません。

「道徳的な」困惑とは、嘘をつくことができない、小説的虚構を作りだすことができない、ということである。これを削除したということは、バルトは虚構を作りはじめていたということかもしれない。そして「欲望している本があります」という言葉は、本のかたちがぼんやりと見えていたことを暗示しているようにも思われる。

バルトの最後の思索を知る三つめの手がかりは、最後の授業となった「写真とプルースト」である。このセミナーは、プルーストをめぐる写真がテーマであるように見える。だが、そうではなく、プルーストがいかに嘘をついたかを確認してゆく作業だったのではないか。たとえば、プルーストの祖母の写真について、バルトはつぎのようなコメントをつけている。

> 嘲弄と目まい。この恵まれない容姿、哀れなほど醜くて、品のない顔。これが、あの愛しい祖母なのだ。『失われた時を求めて』のなかでもっとも美しく、もっとも高貴な登場人物なのだ。[…]ここにやはり現実と文学のあいだに

つねにある深淵を見るべきなのか[25]。

現実と文学のあいだの深淵とは、小説的虚構にほかならない。バルトは、スタンダールだけでなくプルーストもまた、虚構を作りだすちからを手にしていたことをあらためて確認したのであろう。

それまでのバルトは、断章を長い形式に織りあげるための方法をひとつひとつ模索してきたのだった。そして、自伝的ではない「わたし」を語ることや、固有名詞を発見すること、できごとや事物のスケールを変えること、などをいくどとなく挙げてきた。しかしそれらはすべて、小説的虚構のなかにこそあったのである。そう気づいたバルトは、虚構を作りだすことこそが肝要だと考え、それに取り組みはじめていたのではないだろうか。もしかしたら、小説『新たな生』のための虚構が生みだされつつあったのかもしれない。

母の死後に、苦しい喪のなかに沈みこんでいたとき、バルトはプルーストのことを思いだした。かつては、プルーストは評論や理論的分析や読書の楽しみの対象だった。だがこんどは、母の喪のなかで小説を書いたプルーストを必要としたのである。一九七八年六月ごろから、バルトはすがりつくようにしてプルースト作品や、ペインターによるプルースト伝を読んでゆく。『神曲』のダンテが、暗き森で迷っていたときにウェルギリウスに会い、導かれて地獄と煉獄をとおり、地上楽園に達したように、バルトもまたプルーストに導かれて苦しみを通りぬけ、〈小説〉に達することを願っていたのだろう。

プルーストに再会してから交通事故に倒れるまでの一年八か月のあいだ、バルトは新たな生をもとめて、プルーストに導かれながら歩いていた。その苦しい模索のなかから、『明るい部屋』の本や、いくつもの論文、小説『新たな生』の構想、『喪の日記』、講義ノートなどがつぎつぎと生みだされたのである。われわれはそのことに心うたれずにはいられない。

＊註

＊ 引用文の翻訳は筆者による。ただし邦訳のあるものは該当ページを記しておく。

1 Roland Barthes, “Les vies parallèles” [1966], *Œuvres complètes II (1962-1967)*, Seuil, 2002, pp.811-813.

2 Barthes, “Proust et les noms” [1967], *OC, IV (1972-1976)*, p.68. この論文は、*Nouveaux Essais critiques* (1972) のなかに収められたために、ロラン・バルト全集では第四巻におさめられている。（なお邦訳は「プルーストと名前」、『新＝批評的エッセー』所収、花輪光訳、みすず書房、一九七七年、七八頁。）

3 “Une idée de recherche” [1967], *OC, III (1968-1971)*, pp.917-921.（「研究の構想」、『テクストの出口』所収、沢崎浩平訳、みすず書房、一九八七年、一〇六～一一三頁。）

4 *La Préparation du roman I et II, Cours et séminaires au Collège de France (1978-1979 et 1979-1980)*, Seuil/IMEC, 2003, p. 276.（バルト『小説の準備』石井洋二郎訳、筑摩書房、二〇〇六年、三四五～三四六頁。）

5 *Roland Barthes par Roland Barthes* [1975], *OC, IV (1972-1976)*, p.592.（『彼自身によるロラン・バルト』佐藤信夫訳、みすず書房、一九七九年、一六頁。）

6 講演は、コレージュ・ド・フランスで一九七八年十月十九日におこなわれた。“Longtemps, je me suis couché de bonne heure” [1978], *OC, V*, pp.459-470.（「《長い間、私は早くから床についた》」、『テクストの出口』所収、一一四～一三三頁。）

7 “Ça prend” [1979], *OC, V*, pp.654-656.（「固まる」、『ロラン・バルト著作集十』所収、石川美子訳、みすず書房、二〇〇三年、一六三～一六七頁。）

8 *La Chambre claire* [1980], *OC, V*, p.836.（『明るい部屋』花輪光訳、みすず書房、一九八五年、七二頁。）

9 Marcel Proust, *A la recherche du temps perdu IV*, coll. La Pléiade, Gallimard, 1989, p.624.

10 *La Chambre claire, OC, V*, p.850.（『明るい部屋』、九一頁。）

11 *Le Neutre, Cours au Collège de France (1977-1978)*, Seuil/IMEC, 2002, p.39.（『〈中性〉について』塚本昌則訳、筑摩書房、二〇〇六年、三〇頁。）

12 *Ibid.*, pp.184-185.（同書、二四一～二四二頁。）

13 *La Préparation du roman I et II*, p.48.（『小説の準備』、三四頁。）なおプルーストの原文は以下にある。“Vacances de pâques” (1913), *Œuvres complètes X*, Gallimard, 1936, p.114.（「復活祭の休暇」、『プルースト全集十五』所収、鈴木道彦訳、筑摩書房、一九八六年、二二四頁。）

14 *La Préparation du roman I et II*, p.74.（『小説の準備』、六八頁。）

15 *Ibid.*, p.113.（同書、一二一頁。）なおプルーストの原文は、*Contre Sainte-Beuve*, Gallimard, coll.“Idées/NRF”, 1954, p.262.（『サント＝ブーヴに反対する』、『プルースト全集十四』所収、吉川一義訳、一二一～一二二頁。）

16 *Ibid.*, p.161.（同書、一八九頁。）

17 *Journal de deuil*, Seuil/IMEC, 2009, p.248.（『喪の日記』石川美子訳、みすず書房、二〇〇九年、二四一頁。）

18 *OC, V*, pp.1007-1018.（『新たな生』、『ロラン・バルト著作集十』所収、石川美子訳、二八一～二九九頁。）

19 Cf. “Proust et la photographie”, *La Préparation du roman I et II*, p.391.（「プルーストと写真」、『小説の準備』所収、五〇四頁。）

20 “On échoue toujours à parler de ce qu’on aime”, *OC, V*, p.914.（「人はつねに愛するものについて語りそこなう」、『テクストの出口』所収、一五四頁。）

21 *La Préparation du roman I et II*, p.161.（『小説の準備』、一八九頁。）

22 *Ibid.*, p.264.（同書、三三〇頁。）

23 コレージュ・ド・フランスにおける講義の録音はCD化されて販売されている。*La Préparation du roman I et II*, 2

CD MP3, Seuil, 2003.

24 *La Préparation du roman I et II,* p.383.（『小説の準備』、四九五頁。）

25 “Proust et la photographie”, *La Préparation du roman I et II,* p.451.（「プルーストと写真」、五七一頁。）